

未来を咲かせるために 夢の種を蒔き続ける



それぞれの奏者が
個性を映す楽器を選び採り
際立つ音色を奏でる時
地球という名のオーケストラは
永遠の交響曲を生み出す。
「WILL国際文化交流センター」の代表として
欧米やアジアの各国を駆けめぐり
未来を咲かせる夢の種を
蒔き続ける女優・中野良子さん。
その20年にもおよぶ交流から得た貴重な体験と
平和を築くための
「心の橋」についてをお聴きしました。

中野良子さん
女優・「WILL国際文化交流センター」代表

Ryoko Nakano

それぞれが現実に飛び込み、 細胞で感じ取る

世界の国々を訪ねてきましたが、旅を重ねるほどに深まる思いがあります。いま、日本は大きく変化しなければならない時を迎えているということです。

たとえば、日米の関係ですが、予想以上に不安定な状態にあります。これを解消していくためには、アメリカとの窓口をもっと広げなければなりません。戦後の日本は経済の発展のみに力を注いできたので、この部分では長けていても、外国の微妙な心理や動向を捉え、これを活かすという点では、かなり劣っています。

つまり、経済的な貯蓄はあったとしても、情報面での備蓄は極めて乏しいのです。国内に届く情報は穏やかなものが多いようですが、海外では違います。考え方も、心の尺度も、歩む速さも、一桁も二桁も異なるのです。

理解できない川の幅は、日本人の予想以上に広いと感じます。そのことをしっかりと認識する必要がありますね。それも、観念的な言葉ではなく、細胞で感じなければだめです。実際に役立つ情報は待っていても得られません。それぞれが現実に飛び込み、身をもって探す。そこから、ほんとうの国際交流が始まると思います。

「間」を築き、互いに出し合い、 実らせていく

「心の建築」という言葉があります。あるアメリカ人の方に教えていただいたのですが、私の大好きな言葉です。アメリカは様々な人種の集まりですから、そのルーツはさまざまです。だから、つねにお互いが「心の建築」を試みないと平和が保てないわけです。日本の場合は、遠い昔からこれが築かれていて、いまもなんとか無難に済んでいる。それだけに、他国を相手に新たな建築をしようとする、驚くほどの時間がかかる。経済はスピーディーに動いているのに、心の方は10年も、20年もかかる。あまりにも遅い。このバランスの悪さが、今日の日本と外国の関係を象徴しているように思います。

「夢広場」で子ども達に囲まれる中野さん



これからは、「間」というものも大切です。たとえば、今日、あなたに私は初めてお会いしたわけですね。その時、まず向かい合う2人の前に「間」を築くのです。何も無い空間を、互いが少しずつ出し合うことで、ゆっくりと実らせていく。欲しいものを奪い合うから争いが起きる。だから、その逆をすればよいのです。

何も無いところを、少しずつ何かで埋めていくのです。私はこれを「夢広場」と呼んでいます。国際間で政治や経済、文化などの違いに出会った時、日本が先に、だれもが参加でき、語り合える、大きい広場を創っていきましょう。何らかのブレーキがかかったとしても、遠慮したりあきらめてはだめです。一度や二度うまくいかなくても、さらに試みる。三度目には成功するかもしれないのですから...

「3つの眼」も重要です。そこに、自分が存在するために自分を見詰める眼。次に相手の心を見る眼。違いを知り、これを越えて分かり合おうとする、前向きな眼です。これがなければ、事は進みません。そして、2人を客観的に眺める眼。第三の眼、宇宙から見る眼といってもいいでしょう。これは互いが危ない方向へ行きかけた時に、引き戻してくれる力にもなります。

いずれも、永年の経験の中で培ったものですが、特に3つの視点については俳優としての経験が役立っているように感じます。

あの日から、心に波立つ思いを、 解き放つために

現在、「WILL国際文化交流センター」の代表として国際交流に努力しています。「国際間の心の交流」「世界の子どもの教育機会の促進」「地球環境の保護と改善」をテーマに、個人や団体と幅広く協力し、講演会を中心に国際文化の交流を提案しています。その原点になったのが映画「君よ憤怒の河を渡れ」「お吟さま」の中国での大ヒットです。1979年のことでした。撮影の合間にテレビを観ていると、

私が向こうの人々に熱狂的に支持されているというニュースが流れていました。その時、はじめて隣に広大な土地を持った人口の極めて多い国があることを実感し、自分の中にそんな自覚がまったくなかったことに気づいたのです。

また、周囲の人たちも私と同様であることを知りました。次の瞬間、女優ではなく一人の日本人として、こんな状態では、遠くない将来、この国は大きな変革期を迎えざるをえないのでは...と直感したのです。その思いは、招待されて訪れた中国で、さらに確信に変わりました。

西洋社会にばかり眼を向けてきた日本人は、あまりにも隣国をはじめとするアジアの国々を知らなさ過ぎるという実感でした。そこで、まず中国の人々との交流を自分なりに深めたいと考えたのです。その後、観る機会を得た第二次大戦の悲惨な記録映画のインパクトも強烈でした。そして「よし！ これと正反対の幸せな交流を実現しよう」と心に誓いました。以後、今日まで30数回も訪中し、5年前には戦後50周年の節目として、子ども達がよりよい環境で学べるように、中国人民対外友好協会のすすめで、太陽エネルギーを活かした小学校も共同建設しました。いま、私の眼は韓国からアジア、アメリカ、ロシア、ヨーロッパへと広がっています。

初めて中国を訪れた時の鮮烈な体験。人々の熱狂的な歓迎、限りなく広がる黄土の世界、髪を撫でていく悠久の風、不思議なほどの解放感…。それは話してもわかってもらえない特殊な体験です。以来、自分の中で幾重にも波立つ思いに突き動かされるようにして、世界の歴史を学び、未来を考え、人々の幸せに思いをはせています。

宝石のように煌めく、数多くの感激の出会い

世界を旅することで、知り得たことは数多くあります。最近、人権のポスターの仕事でフレーズも依頼され、「慈しみ」という言葉を使いました。これは、ミャンマーの国境の近くでプレゼントされた「星の歌」にあったのです。

「子は眠り 眠る母 枯れ草の山 露に濡れ 山々は星を乗せ きらめく星は せせらぎに せせらぎは 山裾めぐり夜は



Profile

中野良子（なかの・りょうこ）

'71年NHK連続ドラマ時代劇「天下御免」で一躍スターに。'79年映画「君よ憤怒の河を渡れ」「お吟さま」が中国で上映され、特に「君よ憤怒の河を渡れ」で演じたヒロイン「真由美」は熱狂的な支持を得て、実に8億人以上の人々が映画館に足を運び、中国でも空前の人気女優になる。'84年には首相訪中の際のゲストに選ばれ、キャスターに起用される。以後、外務省から世界各国に派遣され、内外で多数講演。'95年中国秦皇島中野良子小学校を共同建設。

'99年ニューヨーク市の公立学校の課外授業に「中野良子の地球の志」が採用される。現在、俳優活動と共に「WILL国際文化交流センター」代表としても活躍。

星を 慈しみ...」という歌詞です。慈しみとは、恵み、情愛、相手を思いやる気持ちをさしますが、それは、遠い記憶の海に眠っていた美しい日本語でした。現代の少なくとも東京ではほとんど口にすることのない言葉です。日本人が忘れかけていた心の言葉に、遙かなアジアの国で出会うことができたのです。

私が国際交流の活動を続けていることをお聞きになったフランス大使の方に頼まれ、「WILL国際文化交流センター」の活動の一環としてパリで講演した時にも、心に残る出来事がありました。

日本を知っていただくために「お吟さま」を上映した後、さらに私の国の風土を感じてもらえればと思い、唱歌のような音色で秋と海をテーマにした曲を背景に、即興でステージを演出しました。着物姿で少し振りをつけて舞台に出たのです。すると、客席のご婦人方が涙も流さんばりに感動されたのです。みずみずしい感受性と素直な心に、私もまた深い感銘を受けました。互いの言葉の壁を超えて、熱い心が通った瞬間でした。

数々の交流の中で得たものを、とてもすべてお話しすることはできませんが、すべてが宝石のような輝きを持った私の宝物で

す。20年ほど前の不思議な経験とインスピレーションに突き動かされて、国際交流という名の永い旅を続けてきました。一人で旅することに疲れ、荷が重過ぎると、立ち止まったこともありましたが、いまでは必ずいつか実を結びと信じています。日本での講演先で「私たちの代わりに行ってください」という身体障害者の方々からの熱い声にも支えられてきました。

アメリカを訪れた時にはアメリカ中の教会で「お吟さま」を上映して欲しいという依頼も受けました。このような、まだ果たしていない約束も少なくありません。私の経験に基づく国際交流をテーマにした映画も創ればと夢見ています。これからも「WILL」が意味するように、強い意志を持って新世紀を突らせる国際交流にできる限り貢献したいと願っています。



新世紀を突らせる国際交流に

特集

ふれあうこころ 感じるこころ

精神障害への正しい理解を

あなたは「こころの病気」という言葉を聞いたとき、どんなイメージを抱きますか。めまぐるしく変化する現代社会では、だれもがストレスにさらされているといっても過言ではなく、「こころの病気」は決して他人ごとではない、そう思う人は多いのではないのでしょうか。それでは、「精神障害」という言葉はどうでしょうか。あるいは「精神分裂病」は？精神障害も精神分裂病も、ストレスをきっかけにしておこる「こころの病気」です。しかし、実際には誤解や不安、そして偏見が生まれています。人はだれしも、知らないことに対しては誤解や不安を抱くもの。でも、正しく知ることが、互いを理解する第一歩へとつながるのです。知ること、ふれあうこと、こころの病気の理解へ向けて、まずは知ることから始めましょう。

精神障害って何だろう

「人は大きなストレスを受けると、不安になる、対人関係がうまくいなくなるなどのことがあります。また、胃潰瘍や過敏性大腸炎といった内科的な病気になることもあります。前者のような症状が出るのがこころの病気。後者は心療内科の病気と呼ばれ、精神障害はこころの病気に含まれます。」

精神障害について、そう説明して下さったのは『京都市こころの健康増進センター』の山下俊幸所長。

精神障害のなかでもっとも多いのが、精神分裂病。100～120人に1人くらいが、かかるといわれています。原因

はまだ突きとめられていませんが、遺伝病といわれるものではなく、また、自分の気の持ちようや、親の育て方とも関係ないことはわかっています。

治療は、まず十分な睡眠と休息をとることから。そして、薬（精神安定剤）を服用しながら、精神的な安定を図り、家庭や社会での生活に戻ることが一つの目標となります。現在では通院医療が中心ですが、状態によっては入院治療が行われることもあります。

「精神障害のわかりにくさは、外見からだけではわかりにくいことや、気力が出ない、物事に集中できないといっ

た病気の症状が、急げていると誤解されてしまうことがあります。病気を癒し、少しずつ元気や自信を取り戻す場が、地域の生活支援センターや共同作業所なのです」と山下所長。

そこで、精神障害者の自立を支える『場』のひとつ、平成10年5月にオープンした伏見区の「ふれあい共同作業所」を訪ねました。

共同作業所は社会への一歩を踏み出す場

京阪「丹波橋」駅から歩いて5分、商店と住宅が交じり合う一角に、その家がありました。家族会が中心となり、伏見保健所や地域の協力を得て生まれた伏見区唯一の精神障害者を対象とした共同作業所です。

メンバーは全員が伏見区の在住者。10代から60代までの27人が、社会参加への一歩を踏み出しています。

開所は週4日、作業時間は午前9時から午後5時まで。朝のミーティングでその日の作業を確認し、箸袋に貼る姉様人形を折ったり、パウンドケーキを焼いたり、チラシを配ったりといった作業を行います。

収入は、1人平均1カ月3000円～4000円。一般企業に就職した人はまだありませんが、平成11年度は2人が京都市の通所授産施設「朱雀工房」に、2人が社会適応訓練を委託された事業所に職場を得るなど、着実に自立への道を歩んでいます。

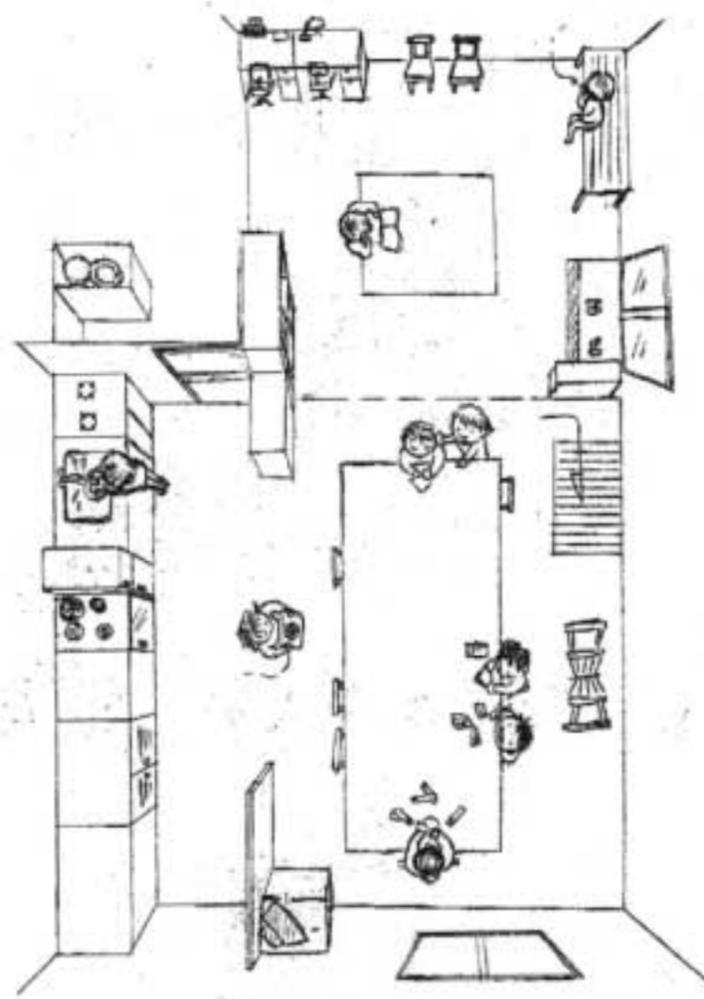
「精神障害という言葉に偏見を持つ人はまだ多く、この共同作業所を開設するまでも長い年月が必要でした。でもここにきている人たちは、症状が改善し、社会に戻りたいと思っている人ばかりです」と話して下さったのは亀山所長。

精神障害者への理解を広げるために、町内会にも入会。南浜・板橋の小学校で開かれるバザーや学区社協及び地域女性会との交流にも積極的に参加しています。また、ボランティアの受け入れもオープンで、近くの茶道の師匠がメンバーのために開くお茶会も恒例になっています。

目下の課題は、新しい仕事の開拓。「もっといろいろな仕事がしたい」、「もっと収入を得たい」という要望がメンバーから出ていますが、不況の中、新規の仕事の受注は思うにまかせないのが現状です。「こんな仕事もあるよとか、一緒にこんな仕事ができないかといった申し出は大歓迎です」と亀山所長は将来に向けて熱くアピールされていました。



メンバーの手で折り紙の姉様人形やステんシルの絵がつけられた箸袋 (5本入り250円で販売)



昨年の夏、地元の小学校で開かれた「板橋夏まつり」に参加

あなたの理解が大きな支えに

さて、あなたの地域にこうした施設や共同作業所はあるでしょうか。

あるとしたら、みなさんはその通所者の人たちにどんなふうに接しておられるでしょう。

「精神障害のある人は対人関係の苦手な人が多いので、



作業所の休憩タイム。亀山所長と腕相撲を楽しむメンバー



作業風景。9畳のスペースしかなく、全員参加の作業ができないのが悩み

『今日はなにをやるの?』とか、『どこへ行くの?』といったことを聞かれると困ってしまいます。でも『おはよう』『さよなら』といった気軽なあいさつは交わしたいと思います。地域にそうした施設がある、あるいはできたとしたら、偏見や思いこみではなく、前向きに受け入れてほしい」と、先の山下所長。

そしてこころの病気は、一見ただけではわかりにくいだけに、理解しにくい面もありますが、病気であることをつらさは、どんな病気でも同じです。

こころの病気や精神に障害のある人たちが、地域の一員として認められ、自立するには、多くの市民のみなさんの理解が必要です。

「してあげる」「してもらう」の関係ではなく、一人ひとりが少しずつこころのバリアを低くすることが、いま求められています。



路地のつきあたりにある「ふれあい共同作業所」。メンバーはそれぞれ徒歩や自転車でやってくる

こころの病気の相談は

「京都市こころの健康増進センター」は、市民のみなさんがこころの健康について気軽に相談したり、情報や知識を得ることができ、精神障害のある市民に社会生活のための情報提供を行ったり、社会参加の推進に取り組んでいる施設です。

センターには、「精神保健福祉センター（相談援助部門/デイ・ケア部門）」、通所授産施設「朱雀工房」、地域生活支援センター「なごやかサロン」があり、デイケア部門では、料理や音楽、スポーツなどのプログラムを通して、こころの病気で通院している人が、人や社会とのかわりを広げていくサポートをしています。また、朱雀工房では「会社に行く自信はまだないけれど、デイ・ケアや作業所に通いながら、仲間とのつきあいもできるようなったし、そろそろ収入を得たい」という人を対象に、一人ひとりの自活を目指した訓練を行っており、なごやかサロンではボランティアやご近所の方々や交流したり、食事サービスや生活情報の提供を受けることができます。

また、各区の保健所でも病気のことや社会復帰に関する相談、家族懇談会などが行われています。

京都市こころの健康増進センター

住 所：中京区壬生東高田町1-15

電 話：314-0874

開 所 日：月曜～金曜（祝日を除く）午前8時30分～午後5時

相談時間：午前9時～午後4時

こころのふれあいプラン推進中

京都市では、精神保健福祉に関する施策の一層の充実と、市民のこころの健康の保持増進を図ることを目的とした「京都市こころのふれあいプラン」を、平成11年3月に策定しました。

期間は、平成11年度から13年度までの3年間で、プランは「精神に障害のある市民の主体性・自立性の確立」、「精神に障害のある市民への理解の促進」など7つの基本的な視点に基づいて策定しています。

シンボル事業として、障害のある市民もない市民も、ともに社会の一員であることを再認識するための相互理解の場であり、憩いの場となる「精神障害者ふれあい交流サロン」を20カ所に、「こころの健康支援パートナー」を1000人に、といった数値目標も盛り込み、市民と行政のパートナーシップによる一体的なプランを推進しています。

人、輝いてます！

スリランカ生まれで京都育ちの「にしゃんた(J.A.T.D.NISHANTHA)」さんは、京都で学ぶ留学生たちの良きアドバイザー。今回はインタビューを通して、本当の国際交流とは何かを考えます。



広めたい！多文化共生

京都市基本構想等審議会委員，21世紀京都幕開け記念事業企画委員，京都ユースホステル協会評議委員…。スリランカから来日して今年で13年目。現在，龍谷大学大学院博士課程で経済学を専攻するにしゃんたさんは，実にさまざまな社会活動に取り組んでいます。

「福島県で開催される青年海外協力隊(JAICA)のパネルディスカッションにも参加する予定なんです」。国際化が進む一方で，家を借りに行けば「外国人は困る」と断られ，就職活動では「前例がないから」と門前払い。留学生の先輩として自分が経験してきたことを訴えていきたい，そう思ったのが社会活動に参加するきっかけでした。今では，留学生たちの頼れる兄貴分といった存在でしょうか。

「『国際交流』というのはとても便利な言葉ですが，ひとつのブームとしてとらえられているのでは」とにしゃんたさん。お花見会や英会話教室，ホームステイなど，日本人と外国人を交えた親睦会はたくさん開催されますが，ほとんどがその場限りのものに終わってしまいます。「いざ日常生

活にもどれば，依然として外国人には門戸が閉ざされたままで進歩が見られない」と，日本の国際交流の在り方そのものに疑問を投げかけます。

「外国人はお客さんという意識を改め，住まいや仕事といった生活の根本部分での受け入れ態勢を整えることが必要なのではないのでしょうか」。

にしゃんたさんは，学生生活を過ごした京都の伝統や文化が大好きなのだといいます。いまでは京都に永住することを希望し，名前をひらがな表記に改めるなど，自分が日本人であることを強く意識しています。それでも，「プールなんかで泳いでいると，子どもたちが僕を指さして『ゴリラがきた』なんて叫ぶんですね」。流ちょうな日本語でしゃべり，日本人の友人も多い。それでも，「外国人」という疎外感が目に見えない大きなバリア(壁)として存在することを改めて感じるそうです。

こうした心のバリアを取り除き，もっと幅広い日本人に留学生の悩みや思いを知ってもらうためには，異文化を理解しお互いを尊重し合う気持ちが必要だとにしゃんたさん。スピーチコンテストや論文大会など，自分の考えを発表できる機会があれば必ず参加し，外国人の立場から本当の「心の豊かさ」や，真の「国際交流」について訴えてきました。じっくりとまわりを見わたせば，ふだん見過ごしがちなものが見えてくるのだとか。

「例えば，スリランカにはシルバーシートなんてありません。高齢者や身体の不自由な人を見たら，みんなが競い合って席を譲り合う。そういう社会の道徳観ができているんですね。かつて日本もそうだったと思うんですが，経済発展と引きか



えに心の豊かさが置き去りにされているような気がしますね」。

「昨年，『多文化共生センター』の理事に就任。阪神・淡路大震災で被害を受けた外国人を支援することを目的に，1995年10月に大阪市に設立されたボランティア団体で，セミナーやフィールドワークを通してあらゆる角度から国際交流活動を進めています。「学生のまち，京都が『多文化共生』の情報発信地になればいいですね」。そう語るにしゃんたさんのさわやかな笑顔がとても印象的でした。

今号のワード

介助犬

どこへでも一緒に行ける日を!

介助犬の育成には様々な訓練方法や躰方があり、京都市内では、現在、「日本介助犬トレーニングセンター」、「介助犬を育てる会」及び「介助犬育成の会」の3団体が育成活動を行っています。今回は、その中の一つ、左京区にある日本介助犬トレーニングセンターに取材の御協力をいただき、介助犬トレーナーの本岡修司さんにお話を伺いました。

同センターでの指示は「サイド（左側に付け）」「テイク（取れ、拾え）」などすべて英語。これは

介助犬とは、身体に障害のある人の自立の助けとなるよう、特別に訓練された犬のこと。1970年代後半から欧米を中心に育成が始まり、立ち上がりを支える、財布や鍵など落とししたものをくわえて渡す、ドアを前足で開閉するなど30種類以上の日常動作の補助を行う。日本で活躍している介助犬は現在12頭(平成12年3月末現在)。宝塚市の「シンシア」など全国各地で育成、支援活動が展開されているが、盲導犬と比べて認知度が低いために、様々な制約が生じている。しかし、平成11年には兵庫県の定例県議会において介助犬の法的認知と普及に関する意見書が可決され、さらに京都市でも今年2月、公共施設や市営地下鉄の介助犬同伴が認められるなど、支援の輪が広まりつつある。

日本語では地域による訛りがあり、犬が判別できないことがあるため、声が出せない障害を想定した、笛による訓練も行われます。常に車いすの左側につく、食べ物は専用の皿に入っているもの以外口にしない、排便は専用の場所以外ではしないなどの基本を覚えた犬は、定期的に依頼者にあずけられ、共同生活を通してだれが主人なのかを認めさせる訓練に入ります。同時に、テレカや切符のような薄いものは、グチャグチャに噛むと使えなくなるので、角をくわえて拾うなど細やかな

背中に「介助犬」と書いたバッグをつけた瞬間から主人の指示以外にはいっさい動かない



トレーナーの木村有希さんの指示を受けてはつらつと動くアトム

エレベーターだって開けられます



レジの支払いもおまかせ

知らない人に食べ物を見せられても知らん顔



配慮ができるような訓練も進められます。

普通、介助犬を1頭育てるには、1年以上の時間と150~200万円の費用が必要です。さらに目の不自由な人をサポートする盲導犬は50年という育成の歴史がありますが、介助犬はまだ法律上の定義や育成方法などの基準もなく、ペットと同じ位置づけです。公的な育成基準や補助はなく、寄付とトレーナーのボランティアで独自に育成を行っているのが実情です。また、飛行機や鉄道に乗るのも事前に関係各社と覚え書きをかわさなければ利用できません。

アメリカでは盲導犬も介助犬も「サービスドッグ」と総称され、障害のある人をサポートするという存在として、同じ認知で受け入れられ、公共の乗り物や施設などへの同伴も認可されているとのことです。しかし日本では、介助犬が同伴することについてまだ取組がはじまったばかり。

介助犬は、肢体に障害をもつ人に自立の選択肢を広げる大切なパートナー。早急に法的な認定基準が定められるなどの公的支援体制づくりが期待されます。

京都市は今年2月、政令市としてはじめて動物園や市バスをのぞく図書館やホール、地下鉄（ただし事前確認が必要）など283カ所の市立施設への介助犬の同伴を認めました。また市内のホテルやスーパーでも介助犬の同伴を受け入れるところが増えてきています。

京都市もすすめています

京都市は今年2月、政令市としてはじめて動物園や市バスをのぞく図書館やホール、地下鉄（ただし事前確認が必要）など283カ所の市立施設への介助犬の同伴を認めました。また市内のホテルやスーパーでも介助犬の同伴を受け入れるところが増えてきています。

出かけて見よう

あんなトコ

こんなトコ

京都から世界へ 人権研究の成果を発信!



(財)世界人権問題研究センターは、人権に関する総合的な調査・研究を進めるアジアで初めての研究機関です。今回は、京都から世界に向けて人権情報を発信し続ける、その多彩な活動内容を紹介します。

かつて、渡来人の秦氏が養蚕や治水などの様々な技術を伝え、平安時代には紫式部や清少納言などの女流作家が活躍した京都。大正時代には、全国水平社大会が岡崎公会堂で行われるなど、人権問題と深く関わってきた歴史をもっています。こうした歴史的土壌を持つ京都の地に、平成6年11月、平安遷都1200年記念事業の一つとして、京都府・京都市・経済界の協力によって設立されたのが「(財)世界人権問題研究センター」です。人権問題を総合的に調査・研究する機関は欧米以外には存在せず、アジア地域で初めての本格的な研究機関といえるでしょう。

現在、専任研究員・客員研究員・嘱託研究員のあわせて約70名の研究者が、国際的人権保障体制、同和問題、定住外国人の人権問題、女性の人権問題の4テーマについて、様々な角度から最先端の研究を進めており、その成果は毎年発行している「世界人権問題研究センター年報」や「研究紀要」に詳しく集約されています。

また、市民のみなさんに人権問題をもっと身近に感じてもらうために、研究活動以外にもシンポジウムや連続講座なども行われています。多彩なワークショップやフ

ールドワークを取り入れた「人権大学講座」のほか、著名な講師を招いての記念講演会の開催、季刊誌「GLOBE」の発行など、センターの取組は日本だけでなく世界中から熱い注目を集めています。また、平成7年5月には、センター内に「人権図書室」を開設。人権に関する蔵書約1万冊を備え、市民や学生のみなさんに開放するなど、地域に開かれた施設を目指しています。さらに『人権の世紀』と言われる21世紀に向けて、今後は外国の研究機関などとも協力しながら、世界的視野に立って人権問題に取り組んでいきます。

人権問題は、一人ひとりが意識を高め理解を深めることが大切。21世紀に向けて、世界的な研究に貢献しようとする世界人権問題研究センターを、一度のぞいてみませんか。

現在、世界人権問題研究センターでは活動に協力いただける賛助会員を募集しています。詳細については下記までお問い合わせください。

(財)世界人権問題研究センター

〒604-0857

京都市中京区烏丸通二条上ル蒔絵屋町263

京榮烏丸ビル7階

電話 / 075 - 231 - 2600

FAX / 075 - 231 - 2750

URL / <http://web.kyoto-inet.or.jp/org/kyohuman/>

E-MAIL / kyohuman@mbox.kyoto-inet.or.jp

「人権大学講座」などの催しは10ページでご紹介しています。



人権図書室

編集後記 昨年5月の創刊から再び若葉の季節を迎えました。より良い紙面を目指し反省と試行錯誤の一年だったように思います。互いに理解し、支え合って共に生きるということは人権問題に限らず大切なこと。実感する共生の輪の広がり。本誌を通じて知り得た方々の生き方に教えられることばかりです。(編集担当C) 本誌に対するご意見、ご感想を右記までお寄せください。この情報誌は、年3回(5月、8月、12月)発行します。

ひと・まち・ロマン  元気都市・京都

発行日 平成12年5月1日

発行 京都市文化市民局人権文化推進部人権文化推進課

〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る

☎075(222)3381

京都市印刷物第120059号

この情報誌は、区役所・支所の地域振興課、市役所の市政案内所ほかで配布しています。郵送をご希望の方は、返信用切手(140円分)を同封のうえ、京都市人権文化推進課までお申し込みください。